

福岡女学院大学紀要 人文学部編 第三十二号

二〇二二年三月

「雪夜思家竹」を中心に

—菅原道真研究ノート3—

東
茂
美

「雪夜思家竹」を中心に — 菅原道真研究ノート3

東 茂 美

はじめに

延喜八年（九〇八）一〇月、菅原道真の大宰府追放に助力したとおぼしい藤原菅根が没した。この数年、蔓延するはやり病に京は疲弊しきっていた。菅根が逝去した翌年には、左大臣藤原時平も病にたおれ、その年四月には三九歳で没している。『北野天神縁起』には、

延喜九年三月の頃とかや、本院のおとど、おほきになやみ給て、耆域が方薬なむれども験なし。安賀二家の秘術、いたづらに祭物をついやす。春日大明神もすて給かとおぼえて、菅丞相の靈氣と心の中にさとりぬ。

と。春日大明神（春日権現）は、いわゆる神仏習合の神で、一殿の不空羅索観音・二殿の薬師如来・三殿の地藏菩薩・四殿の一一面観音を本地仏とする春日大社の神である。春日社は建御雷神・経津主神・天兒屋命・比売神の四柱が主祭神だが、なかでも天兒屋神は藤原氏の祖神でもある。こうしたもつとも慈悲深い仏である観音菩薩・地藏

菩薩、そして瑠璃光をもつて衆生の病苦を治癒し、かつあらゆる災禍から衆生を救うといわれる薬師如来。まさに最高の仏たちが、信仰してきたはずの藤原氏、その藤原氏の、それも時の最高権力者時平を見棄ててしまったというのである。延喜一三年（九一三）三月には、道真の後任として右大臣のポストについていた源光も卒しているから、宮廷から左右の大臣が姿を消したことになる。

まだまだ道真の怨念によって厄難はつづく。延喜二三年（九二三）三月、皇太子保親親王が亡くなった。『日本紀略』は、

世を揚げて言ふ。菅帥の靈魂宿忿の為すところなり。

という。たくさんの宮人が死に、それでもなお菅公のあらぶる魂は鎮まることはなかったというのである。あるいは『大鏡』は、「靈魂宿忿の為すところ」を具体的に次のように語っている。適記して引用してみよう。

……（時平の娘で宇多天皇の女御褰子）もうせたまふ。（時平の）御孫の東宮（慶頼王）も一男八条の大将保忠卿もうせたまひにきかし。……この殿ぞかし、病づきて、さまざま祈りしたまひ、薬師經の読経、枕上にてせさせたまふに、「所謂宮毘羅大将」とうちあげたるを、「われを『くびる』とよむなりけり」と思しけり。臆病に、やがて絶え入りたまへば、經の文といふ中にも、こはき物の怪にとりこめられたまひける人に、げにあやしくはうちあげて侍りかし。……その御弟の敦忠の中納言もうせたまひき。和歌の上手、管弦の道にもすぐれたまへりき。……ただ、この君たちの御中には、大納言源昇の卿の御女の腹の躰忠のおとどのみぞ、右大臣までなりたまふ。……この大臣のみぞ、（時平の）御族の中に、六十余りまでおはせし。……これよりほかの

君たち、皆三十余り、四十に過ぎたまはず。そのゆゑは、他のことにあらず、この北野の御嘆きになむあるべき。

時平一族のなかで天寿を全うしたといえそうなのは、右大臣にまで昇りつめたにもかかわらず、公私の生活のすべてにわたって儉約に勤め、慎ましい暮らしをおくった顕忠だけである。それでもなお、「北野の御嘆き」（道真の憤怒）が鎮まることはなかった。

正暦三年（九九二）安楽寺の巫女の藤原長子なる者の口をかりて、子孫の菅原輔正が大宰大弐となった折の処遇に不満をもらし、さらにまた翌年五月には同じ安楽寺の僧侶の夢枕にたち、朝廷が与えた左大臣・正一位にさえ不満をもって拒んだ。閏一〇月太政大臣を追贈されることとなる。道真は日本太政威徳天・天満大自在天神となる路を、いつきに駆けあがっていくのである。

こうした説話や史書、天神信仰からたち現れる道真にも、大いに関心がよせられるものの、「吾が家は左将にあらず、儒学帰耕に代ふ」（文章八七「博士難 古調」といい、「詩臣」（文章二七「早春、内宴に侍りて、同じく『物として春に逢はずといふこと無し』といふことを賦す 製に応へまつる」）をもって自恃し、その生涯を貫こうとした文人道真の声は、聞こえてこないのではないか。わたしたちが道真と対話しようと呼ぶなら、やはり『菅家文草』『菅家後集』の作品をていねいに読みなおすことしか術はないように思われる。ここでは道真の詠じた竹の意匠をたどりながら、その声に耳をかたむけてみたい。

一 竹を詠う

雪の夜に家なる竹を思ふ 十二韻（後集四九〇）

自我忽遷去

われ忽ち遷り去りしより

此君遠離別

此の君に遠く離れ別れにき

西府与東籬

西府と東籬と

関山消息絶

関山 消息絶えぬ

非唯地乖限

ただに地の乖き限れるのみに非ず

遭逢天惨烈

天の惨烈なるに遭ひ逢ふ

惘黙不能眠

惘しび黙して眠ること能はず

紛紛專夜雪

紛紛たり 專夜の雪

近看白屋埋

近く白屋の埋れるを見る

遥知碧鮮折

遥に碧鮮の折るるを知る

家僕早逃散

家僕は早く逃れ散らぬ

凌寒誰掃撤

寒さを凌ぎて誰か掃ひ撤てむ

抱直自低迷

直を抱きて 自ら低れ迷ふ

含貞空破裂

貞を含みて 空しく破れ裂けぬ

長者好漁竿

長者は漁竿に好かりしに

悔不早裁截

悔ゆらくは 早く裁ち截らざりしことを

短者宜書簡
短き者は書簡に宜かりしに

妬不先編列
妬まくは先づ編み列ねざりしことを

提簡且垂竿
簡を提げ且竿を垂りたらませば

吾生堪以悦
吾が生悦びに堪へたらましものを

千万言無效
千たび万たび言ふとも效なからむ

漣洳亦嗚咽
漣洳としてまた嗚咽す

縱不得扶持
縦ひ扶持すること得ずとも

其奈後凋節
凋みに後る節を其奈

昌泰四年（九〇一）一月二五日に、大宰権帥としての左降する勅がくだされ、わずが六日後の二月一日に京を離れている。筑前国までは陸路で一四日、海路で三〇日だから、二月下旬あるいは三月の上旬には、配所である大宰府南館に着いたと思われる。元号があらたまり延喜となった冬。すでに小雪がちらつくことはあったが（後集四八七「東山の小雪」、いよいよ本格的な冬が訪れた。『菅家後集』ではこの一作の直後に、「寺鐘を聴く」（四九一）があり二月一七日の日付がある。ところがさらに後の作に「元年立春」（四九二）があり、これは一二月一九日のことである。

「寺鐘を聴く」の作品の内容からみて、どうやら一二月一五日からはじまる仏名懺悔会の梵鐘を聴きつつ創作したと思われる、二月一七日の日付は一二月一七日の誤写とみられるところから、「雪の夜に家なる竹を思ふ」は、おそらく延喜元年一二月一七日以前（当日もふくめて）の作ということになる。

某日、大宰府は豪雪となつたらしい。まるで晴天の霹靂のように左遷の命をうけ、宣風坊の家を離れて、庭で育

てていた「此の君」と離れ離れになってしまったとうたう。

右の作品から、まず「此の君」の素性を明らかにしてみたい。「此の君」（此君ともいう）とは竹の異名で、『世説新語』「任誕篇」にある王子猷（？〜三八八）の奇行のエピソードをふまえたものである。

王子猷嘗て暫く人の空宅に寄りて住み、便ち竹を種えしむ。或ひと問ふ、暫く住むに何ぞ爾するを煩はさん、と。王嘯詠すること良久しく、直に竹を指して曰く、何ぞ一日も此の君無かる可けんや、と。

王羲之の第五子の徽之（子猷）は、風雅にとみ、第二子の凝之、第七子の献之らと同じく書をよくしたが、さまざまな奇行でも知られる人物である。子猷が空き家を借りて引っ越したが、すぐに竹を植えたという。そこである人物が、しばらく住むだけなのにわざわざ竹を植える必要がどこにあるのかと問うた。しばらく嘯きうたっていたのだが、まっすぐ竹を指さして「一日たりとも竹なしにいられようか」と返答したというのである。この故事をもつて竹を「此の君」と称するようになった。

子猷の竹への偏愛は別にも語られている。同じ『世説』の「簡傲」にもあって、こうである。

王子猷嘗て行きて呉中を過ぎ、一士大夫の家に極めて好竹有るを見る。主已に子猷が当に往くべきを知り、乃ち灑掃施設し、聴事に在りて坐して相待つに、王は肩輿にして徑ちに竹下に造り、諷嘯すること良久しうす。

主已に失望するも、猶ほ還るとき当に通ずべきを冀ふに、遂に直に門を出でんと欲す。主人大いに堪へず、便ち左右をして門を閉ちて出づるを聴さざらしむ。王更めて此を以て主人を賞し、乃ち留坐し、歛を尽して去る。

かつて呉の地方を通りかかった折に、ある士大夫の庭にすばらしい竹があるのを見つける。その主人は、竹好きの子猷のことだから、きつと訪れてくれるにちがいないと、庭を掃いて迎える用意をし、広間で子猷の到着を待っている。士大夫がどのような人物だったかわからないけれど、子猷が竹の愛好家であることを知っており、自分自身も子猷同様に竹好きで、端正に育てた竹を話題にしたくてならなかったのだろう。

予想どおり、子猷はこの士大夫の邸宅へと輿を進める。当然、主人にあいさつをし、その案内で庭園へと足を運ぶのが、常識的なマナーだろう。この家の主人は広間で歓待の準備をしてころまちに坐っている。しかしながら、そのあてはずれてしまう。竹林の持ち主はまるで眼中になく、輿に乗ったまま庭園へと真つすぐに輿を入れ込み、竹のところどころで何か吟詠しているようす。広間の主人には目もくれないのであった。

さて、しばらくして輿も尽きたのか、子猷はそのまま門を出ようとする。これにはさすがに主人は我慢ならず、左右のものに門を閉じさせ出ていくことができないうようにしてしまった。これを知った子猷は、あらためてこの家の主人に関心をもち、腰をおちつかせて歓を尽くした後に帰っていった、と。

王子猷の行動は、別にふと戴^{たき}逵（三二六―三九六）を思い出し大雪の中を一晚かけて訪ねたものの、その門前までやっと到着しながら内には入らず、会うことなしに引き返してしまつたといつたエピソード（『世説』「任誕」）に似ている。輿に乗じて行き、輿尽きて帰ろうとした奇行にすぎない。ただし、先のエピソードには、もうひとりの奇行の主がいる。いうまでもなく竹の虜になつてゐる呉中の「一士大夫」その人である。たかが竹を見るために立ち寄つただけなのに、家をあげてのてんやわんやの大騒ぎである。竹に魅了されたゆえの奇行であり、それは子猷と共有する「興」であるといえるだろう。そして道真もまた詩人・文人として、こうした「好竹」へとつながるうとするのである。

それにしても道真は、雪に埋もれ無残にも割れ裂けた竹に、どのような心象をいだいていたのだろうか。それを

明らかにするには、まずは竹を詠うほかの作品にも目配りが必要だろう。

二 さらに道真の竹を

道真の作品から、さらに竹を詠う作品をあげてみよう。

疎竹（文章一五七）

(1) 此君何処種 此の君は何れの処の種ぞ

閑在子猷籬 閑に子猷の籬に在りき

不謝寒霜苦 寒霜の苦しびを謝せず

唯充送日資 ただ送日の資に充てらくのみ

殺青書已倦 青きを殺して 書已に倦む

生白室相宜 白を生じて 室相宜し

可愛孤叢意 愛すべし 孤叢の意

貞心我早知 貞心 我早く知る

新竹（文章一八一）

(2) 此君分種旧家根 此の君は種を旧家の根より分てり

一二年來最小園 一二年よりこのかた 最も園に小かりき

今夏新生長又直
剪将欲入釣翁門

今ことしの夏あたら新たに生なひて長ながくしてさらさらに直すくなり
剪きりて釣てうをう翁をうの門かどに入いれむと将す欲ほ

(3)

家の竹を思ふ（文章二二六）

三畝琅玕種有筠
始從旧宅小園分

三さむ畝ぼの琅らう玕かん 種うゑて筠たかむ有あり
始はじめ旧きう宅たくの小せう園えんより分わかちたりき

纒馮客夢遊魂見

纒わづかに客かく夢むの遊いう魂こんに馮よりて見みる

適問家書使口聞

たまたま家書しの使し口こうに聞きひて聞きく

殊恨低迷摧宿雪

殊ことに恨うらむらくは 低てい迷めいして宿しゆくりの雪ゆきに摧くだけむこと

不期長養弘秋雲

期きせず 長ちやう養やうして秋あきの雲うんを弘ひろはむことを

子猷一日猶馳恋

子猷いちじゆ一日いちじつに なほし恋こひひを馳はせしものを

豈敢涉年無此君

豈あに敢あへて年ねんを涉わたりて此この君きみなからむや

(4)

源納言、家の竹を移し種ゑたまふに謝し奉る（文章三二九）

吟嘯此君口棄食

此この君きみを吟ぎん嘯せうして 口くちに喰くふことを棄すつ

豈堪移去入朱欄

豈あに堪たむるに去きりて 朱しゆ欄らんに入いれるるに堪たへむや

空心為是天姿勁

空くう心しんは 是これ天てん姿しの勁きよきがためなり

瘦幹寧非地勢寒

瘦そう幹かんは 寧なんぞ地ち勢せ寒かんきによるに非あざらむや

雖有旧編成蠹簡

旧きう編へん有ありといへども 蠹とく簡かんと成なりぬ

且妨新截当魚竿

且新たに載りて 魚竿に当つることを妨ぐ

梁王欲識孤貞節

梁王 孤貞の節を識らむことを欲りしたまはましかば

請喚相如雪裏看

請ふらくは 相如を喚びて 雪の裏に看しめむことを

睡らず（文章三〇八）

(5) 不睡騰騰送五更

睡らずして 騰騰として五更を送る

苦思吾宅在東京

苦に思ふ 吾が宅の東の京に在ることを

竹林花苑今忘却

竹林 花苑 今や忘れ却りぬ

聞道外孫七月生

聞道く 外孫の七月に生れたりといふことを

(1)の「疎竹」は元慶九年（仁和元年）、道真四一歳の作である。ひと群の竹を「此の君」と称して愛した王子猷に思いをさせて、庭の竹をながめている。竹は霜が降りても青く、色鮮やかさはかわらず、日々の竹簡となつていゝる。「青きを殺して」は、書写用として用いるために、火にあぶつて書きやすくしたことをいうのである。

もちろん、紙の普及していた京都で道真が竹簡を用いていたとは思われないが、竹簡の青と「殺青」をほどこした白の彩に、書き倦むほどに書き重ねてきた、道真の満足感もうかがえそうである。

そして、お前がうちに宿した貞堅の心を、わたしは早くから知っているのだと、ひと群の竹に語りかけるのである。結句の「我」は別に「文章は暗に家の風に誘はる、吏部は愉に祖業存するに因る（文章博士になれたのは父祖伝来の家風のおかげであり、式部少輔になれたのも、父祖の偉業ゆえである）」（「読書の後に、戯に諸進士に寄す」文章八二）といった菅原氏の職掌に自負をもつ「我」と同じ「我」だろう。

(2)の「新竹」とは、いわゆる「今年竹」の意である。庭に生えている竹は、もとの家にあつた竹林から根分けして移植したもので、この二、三年は小さな群竹のまま変わり映えしなかったのだが、今夏になってはじめて地下茎から芽が伸び筍が育ち、みごとに竹となった。そこでこれを切つて、釣りの爺さんのところへもつていこうというのである。

「釣翁の門」は魚釣りを生業とする老人の家と解してもよいが、この翁は、たとえば有名な『楚辞』「漁夫辞」に登場する「漁夫、莞爾として笑ひ、櫂を鼓して去る」漁夫、つまり、世俗をはなれ身を隠して、江湖に釣りをし、欣然と楽しむ、そうした隠者をイメージしているのかもしれない。

(3)の「家の竹を思ふ」は、仁和三年（八八七）の作。道真は前年二月一六日、讃岐国守に任じられた。地方官となって任地へ到着したのは三月半ば、道中「中途にして春を送る」・「途中にして中進士に遇ひて、便ち春試の二三子を訪ふ」と題して二首を創作、ここでは「春は客行くひとを送り 客は春を送る、心を傷ぶ 四十二年の人」（文章一八八）とうたっている。「四十二年の人」はいうまでもなく、道真自身である。祖父の清公も父の是善も、地方官僚となって外地に赴いたことがなかっただけに、讃岐国への道中はけつして楽しいものではなかっただろう。ことは讃岐で暮らし始めてからも同じで、鬱々として日々を過ごしていたらしい。讃岐国の公邸にも庭園があつたはずで、そこにも竹が生えていたのだろう。それを見れば、やはり思い出すのは京都宣風坊にある私邸の竹。三筋の畝に植えた竹が茂り、今頃は筍も生えているだろうと想像する。「琅玕」は崑崙山から出土する美しい玉をいい、竹に最大の讚美をよせている。その竹と別れ讃岐にいる道真は、夢路をふらふら遊行する魂だけが、かろうじてわが家の竹やぶを見ることができるといっているのである。

京から便りを運んできた使いに、竹の近況を訪ねてみる。すると、冬の降雪の重みに耐えかねて、折れてしまつたという。「二三畝」は三〇歩ほどでそれほど広くはないが、わざわざ旧宅から移植し大切に育ててきた竹で、本来

なら秋の雲を払うような丈高く堂々たる姿になってほしいのだが、そういう欲をかくような望みはもたぬ、せめて残った竹林が雪の重みにくじけないで育ってほしい。これが道真の願いである。子猷は一日「此の君」を見なくても恋しいとしたが、道真の場合には、すでに一年をこえていた。

(4)「源納言、家の竹を移し種ゑたまふに謝し奉る」は、寛平二年（八九〇）の作。この年の春、道真は官僚の交替のルールである「交替式」にしたがわずに、帰京している。本来ならば後任の国守が業務の監査をふくむ引き継ぎをおこない、監査済みの証明書をもたらしてはじめて帰任するのだが、道真はこの解由制度のルールを守らなかったのである。帰任後、公務違反の弾劾の対象にならなかったのは、その後、蔵人頭となり（寛平三年二月二十九日）、式部少輔となり（同年三月九日）、左中弁を兼任（同年四月一日）するといった、宇多天皇の異常ともいえる抜擢による昇任ゆえだろう。⁽¹⁾

道真は源中納言（源能有）を「梁王」（梁の孝王）に、自らを司馬相如にたとえて、「孤貞の節」をうったえる。

このあたりは、謝惠連（三九七〜四三三）の「雪の賦」に拠っているとみて、確かだろう。やや長い引用になるが一読する。

歳、将に暮れんとし、時既に昏なり。寒風積り、愁雲、繁し。梁王悦ばずして、兔園に遊ぶ。迺ち旨酒を置き、賓友に命ず。鄒生を召し、枚叟を延く。相如末に至り、客の右に居る。俄かにして微霰零ち、密雪下る。王迺ち北風を衛詩に歌ひ、南山を周雅に詠ず。簡を司馬大夫に授けて曰く、子の秘思を抽き、子の妍辞を騁せよ。色を俾しうし称を揣り、寡人の爲に之を賦せよ。

梁のある歳の暮れ、文帝の子で景帝の弟である劉武は、兔園に遊んだ。兔園は自ら造園した庭園で、三〇〇里四

方もあり、なかには落猿巖、栖龍岫、雁池、鶴州、鳧島といったエリアがあり、そこには多くの宮殿や樓閣が建てられ、贅を尽くしたものだということ。梁王に招かれたのは、まず鄒生（鄒陽）、次いで枚叟（枚乘）、そして相如である。鄒生はかつて呉王劉濞に仕えていたが後に梁王のもとに就いた。枚叟も、呉楚七国の乱（前一五七）の際に上書していさめたものの、呉王がとりあげなかったことでそこを去り、梁王のもとで賓客となっていた。辞賦の創作を争った文人でのひとりで、「七」という新文体を開いたことで有名だろう。^②

そして司馬相如である。相如は最後に参上したにもかかわらず、文人たちの上席について、梁王のリクエストにこたえる。王はちらついていていた雪がやがて大雪となったところで、『詩経』（邶風）から「北風の詩」を、そして同じ『詩経』（小雅）から「信南山」を詠い、司馬相如に竹簡を手渡し、雪の美しさを賦すように命じるのである。相如は席を外し再拜して雪を詠じた先行する作品をまず紹介しながら、

散漫 交錯 氛氳 蕭索 藹藹 浮浮 漣漣 弈弈 聯翩 飛灑 徘徊 委積 便娟 繁盈 積素 爛燦
繽紛 繁鷺

といった、辞賦の特性ともいえるべき難解な漢字を書き重ね、微に入り細にわたって雪が降るさまを活写していく。いま便宜的に現代語訳をこころみながら、次のように口訳できようか。

その様子は、散り乱れ（散漫）交わり合い（交錯）、さかんに降り（氛氳）、もの寂しく（蕭索）、集まり合つて（藹藹）は浮き上がり（浮浮）、ひょうひょうと盛んに（漣漣）降る。次々に飛びそそぎ（弈弈・聯翩）飛灑、ぐるぐる回りながら（徘徊）も積もつていく（委積）。初めはいらか、次いで棟を舞い落ちて（便娟）う

ずめ、ついにはすだれを巻き上げ、すき間から降り込んでくる。初めは廂ひさしのあたりをぐるぐる回っているが、のちにはカーテンのところまで舞い込んでくる（縈盈）。……積もった雪（積素）がまだ消えず、朝の白日が鮮やかにさすときらきらと輝いて（爛）、それはまるで燭龍4が光を口にくわえて崑崙山を照らしているよう。また、滴りおち氷柱つららを垂れて、樋とぎを流れるようになると、さんさんときらめいて（燦）、水の神である馮夷ひょういがハマグリを割ってその中の真珠をつらねたようです。⁵あの雪の、紛紛と乱れ回るさま（續紛）純白にして潔白なようす、うずまき降りまつわり積もる勢い、飛び集まり凍り輝く（繁鶩）不思議さは、まったく変転きわまらないものがあつて、よくは分かりかねるのです。

といった描写がつづく。その後は、こうした降り積もる雪のさわまりない楽しさがさらにつづられるのだが、いまは省略にゆだねよう。

作品のごく一部を引用してみたが、一文字の語彙とも二文字の語彙とも判別のつかない圧倒的な漢字の力によつて、雪景がかたどられていくのである。

こうした相如の披露する「雪の賦」を鑑賞して、鄒陽はもだえんばかりに感服し、相如の作につづけて「積雪の賦」と「白雪の賦」を創作して宴席で披露する。その披露が終わるや否や、興奮をおさえることのできない梁王は、かたわらに待する枚乗に、「雪の賦」をしめ括る一文、すなわち「乱」の創作を命じるのである。おそらくはここに、道真が「雪の賦」を引用した意図があるように思われる。

乱に曰く、白羽白しと雖も、質以て軽かろし。白玉白しと雖も、空しく貞を守る。未だ若しかず、茲この雪の時に因よつて興滅するに。玄陰凝こるも其の潔けつを味あじうせず、太陽か曜やくも其の節せつを固かうせず。節豈せつ我が名なならんや、潔けつ豈せつ我が

貞ならんや。雲に憑りて陸降し、風に従つて飄零す。物に値ひて象を賦し、地に任せて形を班つ。素は遇ふに困りて立ち、汚は染むるに随つて成る。心を皓然に縦にし、何をか慮り何をか嘗まんや。

枚乗は、雪の本性を賦して、以下のようにいうのである。まず羽や玉の白さを認めるものの、それらの白さは雪の白さに及ばない。雪は、冬の気がどれほどきびしくてもその潔白さを変えることもないし、逆に太陽がかがやきその陽気が高まっても、それに左右されて雪としての節を曲げたりもしない。

だからといって、潔白であることに固執しているわけではない。雪はただただ雲の動きにしたがつて降ること、風のままに漂うこと、降り積もるもののかたちにしたがつて、自在におのれの姿をかえること、それらがむなく白さだけを守っている白羽や白玉と異なる特質なのだ、と詠う。雪の白さは出会うものによつて決まるのであり、たとえば雪の汚れは染められるままに汚れるだろう、と。「汚は染むるに随つて成る」には、いまひとつ私見が及ばない。

さらにいえば、「心を皓然に縦にし」は『孟子』「公孫丑章上」の、

我言を知る。我善く吾が浩然の気を養ふ、と。敢て問ふ、何をか浩然の気と謂ふ、と。曰く、言ひ難きなり。其の気たるや、至大至剛、直を以て養うて害すること無ければ、則ち天地の間に塞がる。其の気たるや、義と道とに配す。是無ければ餒う。是集義の生ずる所者にして、義襲うて之を取るに非ざるなり。行心に慊からざること有れば、則ち餒う。我故に曰く、告子は未だ嘗て義を知らず、と。其の之を外にするを以てなり。

弟子の公孫丑が、当時性善でも性悪でもないという説を建てて論陣を張っていた告子なる人物と孟子との、心

の発動のありかたの優劣を、質問したくだけりである。孟子は告子よりも自分のほうがよく他人のことを理解するし「浩然の氣」を養っているとたえ、この二点で告子よりもすぐれているという。公孫丑はさらにその「浩然の氣」とやはら、いったいどのようなものかを問う。孟子自身「言ひ難きなり」というのだから、説明もいささかあいまいになりがちである。

つづめていうなら、どうやらこの「浩然の氣」は天地のあいだにあふれる元氣（万物の生命力であり活力の源）で、このうえなく大きな氣をいうらしい。

この氣は正義と人道に配合されており、この義と道から離れてしまえばエネルギーを発することはなくなってしまう。これを人の立場でいうなら、道義にしたがい内部にはぐくんできくなら、天地にみまざるほどのエネルギーをもつことができるというのである。

したがって「浩然」とはただ虚しいだけの広がりではなく、自然に生じ天地に元氣があふれる光景を表現しているといえそうである。謝惠連「雪の賦」の雪は、天地の間に生じた公明正大な物象と位置づけていたのだろう。

道真是源中納言（源能有）を「梁王」（梁の孝王）に、自らを司馬相如にたとえるのであったが、このふたりを圍繞するのは、謝惠連が讃仰してやまない兔園の雪景だったのである。

最後に(5)の「睡らず」も見ておきたい。「冬夜九詠」（文章三〇八〜三二六）のうちの一詠である。「冬夜九詠」は、収載順に「睡らず」「独り吟ず」「山寺の鐘」「経を誦む」「老松の風」「暁の月」「野村の火」「水の声」「残り燈^び」で構成されており、讃岐国の私邸でうたわれた寛平元年（八八九）の作。

道真が讃岐国守に任じられたのは仁和二年（八八六）一月、着任したのは三月下旬。寛平二年春に帰京しているので、久しく都を離れているように思われるが、周知のように、仁和三年秋に帰京し都の自宅で年を越し、翌年の春に讃岐へ帰任している。道真は三年十一月一七日に正五位下に叙せられた。恒例として毎年正月七日の白馬節会

（一月七日）の餐宴に際して、位記があたえられたところから、これに関わって帰京がゆるされたのだろう。⁶

さらにこの年の冬一〇月にもふたたび上京したらしい。菅家廊下で学んでいた擬文章生の文室時実が、春の省試で合格し進士しんじとなった。その吉報を道真は「春勝」（春の公報）で知った（文章二四四「懐しるひを書くして文才子に寄す・二四五「文進士の及第せることを聞き、客舎の壁に題す」）。その後、時実は老母を残して道真のいる讃岐国を訪問し一か月ほど滞在している（二六四「文進士が新たに及第して、老母を拝辞して、旧師を尋ね訪ひしことを謝す」。重陽の節会を過ごして帰京しているから（二六八「文進士を別る」）。心情的には、それを追うようにして道真も帰京したのかもしれない。

「冬夜九詠」は、九首が「冬夜」を主題にまとめられており、連作としての意味も明らかにすべきだろうが、ここでは「睡らず」だけに注視したい。「騰騰として五更を送る」は、気が高ぶり浅い眠りのまま「五更」を覚えたの意。一夜を五分した最後の時刻。季節によって異なるが冬は現在の時刻で、冬は午前三時二〇分頃から六時頃までだから、眠れないまま朝をむかえてしまったのである。都から讃岐国にもどってきた道真は、郷愁に責められて気がたかぶって眠れなかった。雅な宮廷のここかしこ、都大路のにぎわい、宣風坊のわが家、懐かしい人びとのことが思われてならなかったのだろう。

「騰騰」は、楽天の「書に代かふる詩一百韻、微之に寄す」によったとする、『大系』頭注の指摘が至当だろう。元和五年（八一〇）の作で、この頃、元稹は左降され江陵土曹参軍となって湖北省江陵县にいた。

ただし、楽天の「騰騰」は、同じ気の高ぶりではあっても、榮達を胸に朝から晩まで刻苦勉強していた時代であり、ともに遊覧もし詩の善し悪しをめぐって議論したり碁を囲んだりもしていた時代であり、都の郊外の曲江あたりまでもくり出していた時代、そのような血気盛んな形容として用いられているように解釈される。とはいえ、この一作の後半が次のように結ばれているのを看過してはなるまい。

いまは『全詩集』「詩意」から、その一部を一読する。

……君の態度があまりに剛直厳正であつたので、忽ち寵臣の讒を被り、江陵士曹に貶せられることになつた。そこで君は……幾多の山川を過ぎて任地に到着した。故郷を思ひ宮闕を望んで常に心を傷ましめ、春の鳥、秋の虫を聞いては涙を流した。まして妻を喪ひ兒を擁して、坐に艱苦を嘗めた。君は常に英気を負ひ忠心を抱いてゐても、誰も認めてはくれず、金言玉性も空しく埋没した。……時時君の旧宅のあたりを訪うて、遙に君を憶ふのみである。茲に一千字の狂詩を作り、書状に代へて遠く君に寄せる。

こうした白楽天の狂詩のくだりから作品をひるがえつてみると、元和五年の楽天にとつて、かつて右のような苦境がまつているとも想像だにせず、意気揚々とふるまつていた記憶も、いまとなつては「騰騰」（胸をかむような感情の高まり）の意をおびているように思われる。もしそうなら、道真の「騰騰」と類似することになるだろうし、道真もじゅうぶんそれを感じたうえで表現であつたというべきだろう。眠れない異様な高ぶりは、その底辺に澱む苦しみが見て取れそうである。

さらに元稹によせた楽天の一作を紹介しよう。

元九が新に栽うる竹に対して懷有り寄せらるるに酬く

昔我十年の前、君と始めて相識る。

嘗て秋竹の竿を將て、君が孤且つ直なるに比す。

中心一に以て合ひ、外事紛として極り無し。

共に秋竹の心を保ち、風霜侵し得ず。

始めて嫌ふ梧桐の樹、秋至れば先づ色を改むるを。

愛せず楊柳の枝、春来れば軟かにして力無きを。

憐む君我に別れて後、竹を見て長く相憶ひ、

常に眼前に在らしめんと欲し、故に庭戸の側に栽う。

首を分つて今何処ぞ、君は南我は北に在り。

我君に贈る詩を吟じて、之に対して心惻惻たり。

これも元九（元稹）が江陵にあつた時の一首である。「頃ろ元九に贈る詩あり、云く、節あり秋竹の竿と。故に元之に感じ、因つて重ねて寄せらる」の付記がある。元稹が赴任した江陵で庭前に竹を植えたいらしい。その竹をながめていて、かつて樂天が贈ってくれた一作にあつた「波無し古井の水、節有り秋竹の竿」を思い出し現況の思いを詠ってきたというのである。元稹の作は『全唐詩』（卷397）に「竹を種う」をひろうことができるが、ここではふたりが話題にしている「波無し古井の水、節有り秋竹の竿」が重要だろう。先立つ樂天の作は、こうである。作品の前半を引用する。

元稹に贈る

我宦遊に従つてより、七年長安に在り。

得る所惟だ元君のみ、乃ち知る交を定むるの難きを。

豈山上の苗無からんや、径寸歳寒無し。

豈えうじん要津の水無からんや、咫尺波瀾有り。

之子このこ是こゝに異り、久要誓きうようつて諉わづれず。

波無ななし古井こせいの水、節有り秋竹しゅうちくの竿。

一たび同心の友と為り、三たび芳歳らんの蘭に及ぶ。

官途について七年、長安暮らしのあいだにできた友はただ元稹だけである。山上に草木の苗が生えてないわけではないが歳寒に節を曲げぬものはまれだし、重要な港に水がないわけではないが、水があるゆえに波立ち荒れて水難のさわぎもおきる。たとえていえば、これが官界なのだ。「歳寒」も「久要」も『論語』「子罕」に出ている語句である。⁽⁸⁾ところが元稹だけは他の人びとは異なり、久しい約束さえも反故にすることもなく、一度友となつてからはずっと友情はかわらず、もう三年の歳月がたった。こうした元稹をたとえていうなら、古井戸に波が立たないような、枯れることのない秋竹にたしかな節があるような、そのような人物だという。「波無し古井の水、節有り秋竹の竿」は、楽天が与えた元稹への人物評なのである。

元稹は赴任地に植えた竹のひと群をながめながら、この語句を思いだしたのかもしれない。いや逆に、この楽天がかつて贈ってくれた「秋竹」の評に自らを重ねて、せつせと竹を植えたのではなかったか。

元稹の「竹を種う」にこたえて、楽天はふたたび「秋竹」をもつて心をよせ、くるくる転じる世相のなか、桐の葉が秋になるとすっかり黄葉して落ちるような、あるいは楊が春の陽光に媚び力なくこうべを垂れてしまうような、節度のない官途を歩んではこなかったと自負し、励まし、同情するのである。「竹」は元稹であり、そして楽天でもあった。

道真は「睡らず」の結びを、家族を話材に選んでいる。「竹林 花苑 今や忘れ却りぬ」と詠うのだが、むしろ

事実はそれとは逆だろう。宣風坊の庭にある、竹の茂みや植え込みの花ばなのひとつひとつ、閉じたまぶたに際やかに浮かんでくるのだろう。そして、その竹林から透けてうかがえる家族のありさまがある。他家に嫁した娘に孫ができたという便りがとどいたのであった。

道真には、尚侍典侍となった寧子、斉世親王室として源英明を生んだ女子、宇多天皇の女御の衍子、寛平元年（八九）夏に子を産んだ女子つまり「睡らず」に詠われている女子、西海への流謫にともなった女子と、これまでに想定されるだけでも五名。

具体的には、斉明親王の妻となった女子で、この女子が生み落とした子が「外孫」と表記され、源英明ではないかといわれている。しかし、父となる斉明親王は延長五年（九二七）に四二歳で没しており、寛平元年にはまだ年端もいかぬ四歳ではない。ここで「外孫」といわれるのが誰かは未詳というほかはなく、こうした家庭については後考にゆだねたい。

三 楽天の竹

道真がこれまで見てきたように竹を詠うのに、白楽天の作品が深くかかわっているのは周知のとおりだが、ここで楽天の詠う竹について確認しておこう。

道真が「書齋記」（文章五二六）で、

東の京の宣風坊せんふうぼうに一つの家有り。家の坤ひつじまの維すみに一廊有り。廊の南の極かぎりに一局有り。……山陰亭なと号づくるは、小山の西あに在るを以てなり。戸前かたはら近き側に一株の梅有り。東に去ること数歩すほ、数竿の竹有り。花の時に至る毎ごと

に、風の便りにあたる毎に、情性を優暢するに可以く、精神を長養するに可以し……。

とつづるのも、楽天に学んだところが大きいというべきだろう。すこし引用が冗長になるが、楽天の「竹を養ふの記」を掲げてたどつてみたい。便宜的に段落をもうければ、内容は次のように三段落にわけることができよう。

竹の賢に似たるは何ぞや。竹は本固く、固くして以て徳を樹つ。君子は其の本を見れば、則ち善く建ちて抜ける者と思ふ。竹は性直く、直くして以て身を立つ。君子は其の性を見れば、則ち中立にして倚らざる者と思ふ。竹は心空しく、空しくして以て道を体す。君子は其の心を見れば、則ち応用虚しく受くる者と思ふ。竹は節ありて貞、貞にして以て志を立つ。君子は其の節を見れば、則ち名行を砥礪し、夷險一致する者と思ふ。夫れ是くの如し、故に君子人は多く之を樹て庭の実と為す。

貞元一九年春、居易抜粹を以て選ばれて及第し、校書郎を授けらる。始めて長安に於て仮の居処を求め、常楽里の故関相国の私第の東亭を得て之に処り。明日、履みて亭の東南隅に及び、叢竹を斯に見る。枝葉殄瘁して、声無く色無し。関氏の老に詢へば、則ち曰く、此れ相国の手づから植ゑし者なりと。相国館を指して、他人仮に居り。是に由つて筐篋の者焉を斬り、箒箒の者焉を刈る。刑余の材、長さは尋無く、数は百無し。又凡なる草木の其の中に雑生する有り、藜茸薈鬱として、竹を無みするの心有り。居易、其の嘗て長者の手を経たるに、俗人の目に賤しまれ、剪棄せらるること是くの若きも、本性猶ほ存するを惜しむ。乃ち藟薈を芟り、糞壤を除き、其の間を疏にし、其の下を封ずること、終日ならずして畢ふ。

是に於て日出でて清陰有り、風来たりて清声有り。依依然、欣欣然として、感遇に情有るが若きなり。嗟乎、竹は植物なり。人に於て何ぞ有らん。其の賢に似たること有るを以てすら、人猶ほ之を愛惜し、之を封植す。

況んや其の真に賢なる者をや。然らば則ち竹の草木に於けるや、猶ほ賢の衆庶に於けるがごとし。嗚乎、竹は自ら異にする能はず、惟だ人のみ之を異にす。賢も自ら異にする能はず、惟だ賢を用ひる者のみ之を異にす。故に「養竹記」を作り、亭の壁に書して、以て其の後の斯に居る者に貽り、亦た以て今の賢を用いる者に聞せんと欲すと云ふ。

樂天は竹が賢人に似ているといい、その理由をていねいに論じている。まず竹は根がはっついてしっかりしている。これは賢人も同じで道を確認していて、ゆらぐことなく同心をうしなうことがない。竹はまっすぐに成長する。それと同じく賢人も偏ることなく中庸をもつばらとする。竹は空洞であつて中身がない。しかしそれゆえにひとつの道を会得しているともいえそうである。賢人も同じ。凡庸な雑事にふりまわされることなく、心を虚しくしてこそ物事を偏ることなく受け入れることができる。

だからといって、分別なくみだりに受け入れるわけではない。竹には節があるように、賢人も節操をもち堅い志をもつて生きてこそ、賢人といえるのだ。自分をみがき順境にも逆境にも表裏のない生き方をする。それこそ竹の生きざまであつて、賢人の生きざまでもあるのだ。これが樂天の主張する第一である。

貞元一九年（八〇三）、校書郎となつた樂天は長安の常楽里に住まいをもとめ、故関相国（播）の私邸の一隅、東亭に仮住まいしたという。閑適詩「常楽里の閑居、偶十六韻を題し、兼ねて劉十五公輿・王十一起・呂二昊・呂四類・崔十八玄亮・元九稷・劉三十二敦質・張十五仲元に寄す。時に校書郎たり」では、暮らしぶりを「茅屋四五間、一馬二僕夫。俸錢万六千、月給りて亦余有り……窓前に竹の翫ぶべき有り、門外に酒の沽る有り。何を以てか君子を待たん、数竿一壺に対せん」と詠っている。窓の外には竹も生えているし門の外には酒屋もあるから、大したもてなしもできないけれど、竹を賞玩しながら酒を飲み交わすことはできる、と。まるで転居の挨拶状のような

一首である。ここでも竹が詠われている。

この竹は旧住人の関相国が手ずから植えて大切に世話していたものらしい。ところが相国が亡くなり住む人もかわると、竹籠や竹箒を作る者が竹を切り出し、雑草や雑木にも埋もれて、すっかり荒れはててしまったのである。そこで楽天は、まだ生き残っている竹をいとおしく思ったのだろう、竹を救うべく、雑草や雑木を刈って風通しをよくし、けがれた土は除いて新しい土を盛って、養生したのだった。二段落目には、竹に関心をもって養生した具体例をつづる。

それにしても、なぜ、これほどまでも楽天は竹にこだわるのだろうか。以下のくだりでそれを明かす。日が昇ると清らかな陰ができ、風が吹くと清らかな葉音が聞こえる。賞玩すべき「清陰」と「清声」がある。こうして竹が賢人に似ているというだけで、重用されるのだ。ましてや賢人そのものはどうか。「其の賢に似たること有るを以てすら、人猶ほ之を愛惜し、之を封植す。況んや其の真に賢なる者をや」には、楽天のつよい語気がこもる。

じつは竹自身は、周囲の雑草・雑木よりもすぐれていると自覚しているわけではない。埋もれながらも、そこから這い出すこともなく、巷間に埋もれるままに、そこで生きるしかないのである。ただ人のみが、竹の特性を見出し優れたものとすることができるのである。これは賢人と庶民との関係に似ているではないか。賢人も凡庸な人びとのなかに埋もれていては、賢人たるはたらしきもできない。賢人を求め用いる人のみがその真価を知るのだ。これが楽天の主張である。

楽天が竹を題材として創作する作品は多いが、ここではもう一例、小品「橋上の竹に別る」を紹介しておきたい。

橋を穿つうが 進竹行はうちくぎやうに依らず、

恐らくは行人かうしんを礙さまたけて損傷そんしやうせられん。

我去りて自ら慙はづ遺愛あ少すなく、

君をして甘棠かんたうに似るを得えしめざるを。

元和一三年（八一八）一二月、忠州刺史に任命され、年をこえて三月に着任している。ところが、さらにその翌年には尚書司門員外郎に押し、あわただしく忠州から長安に召還されている。一五年の正月に憲宗が宦官の王守澄や陳博志らの手によって暗殺され、閏正月に新帝の穆宗が擁立されている。楽天の移籍もこうした大きな政治の動向と無関係であったとは思われないが、いまはふれない。

「迸」は勢いのあるさま。ほとぼしるさまの意。いまや橋をつらぬきそびえ立つて繁茂している竹を詠った。「行に依らず」だから、これまで妨げられることもなく成長して乱生しているのだらう。忠州に着任してより二年のあいだ、楽天はこの竹を見守ってきたのである。離任するにあたって、橋を往来する人びとのじやまになるといって、伐りたおされたりしないかと、しきりに気がかりだ。だからといって、わたしにはかの召伯ほどの徳もないので、お前（橋上の竹）を守ってやることができない。ああ、慚愧にたえないことだ、と。

「甘棠」は木の名で、カラナシ（カリン）ともリングともいわれている。カリンであれば果実は楨めい櫃いとよばれる生薬で、酔い覚まし・咳止め、下痢止め・疲労回復に効果があるものの、種子には毒素（シアン化水素）を発生させるものもあるといわれている。約二千年まえから漢方薬の薬剤として用いられてきた。

この「甘棠」は、ふるく『詩経』（国風・召南「甘棠」）に、

蔽へい芾はたる甘棠は剪きること勿なかれ、伐きる勿なかれ、召伯やどの芟やりしもの。

蔽へい芾はたる甘棠は剪きること勿なかれ、敗きる勿なかれ、召伯やどの憇いひしもの。

蔽芾たる甘棠は剪ること勿れ、拜る勿れ、召伯の説りしもの。

「蔽芾」は幹や葉がとて小なさまをいうが、ここでは甘棠がうっそうと茂っているようす。西周の宰相だった召公奭は、太公望や周公旦とともに、周の建国にあたって尽力し功績をあげたことでひろく知られる人物である。召公は国内をくまなく巡視したが、領民たちをわずらわせないように、ちいさな甘棠のもとにやどって耳を傾けたという。そのさばきは常に公平で理になつたものであり、領内の風紀は高まり、人びとの暮らしも豊かになつたのだつた。領民たちは、召伯が亡くなつた後も徳を慕い、ゆかりの甘棠をたいせつにしたのである。以上が、いわゆる「甘棠の愛」と称される故事で、「甘棠」は樂天のみならず、早くは漢代から、執政にたずさわる官吏の頌徳碑などにひろく引用される表現である。

樂天は甘棠を愛し、意図していたわけではないものの結果的には甘棠を救つた召伯を登場させ、徳がないゆえに橋上の竹を「甘棠は剪ること勿れ」と救済する力のないわが身を恥じたのである。同時期に「東坡に種えし花樹に別る、両絶」があり、そこでは、「花林好住顛顛する莫れ、春至らば但知れ旧に依るの春。楼上明年新大守、妨げず還是れ花を愛する人」と花に向かつて詠っており、じつは「花林」も「橋上の竹」も自然の風物ではなく具体的な人物がたとえられているのかもしれない。

四 ふたたび「雪の夜に家なる竹を思ふ」

道真是、宣風坊の庭に植えてたいせつにしていた竹のひと群を思う。左遷の命をうけあわただしく京を発つたはずで、「此の君」に存分な養生をほどこして別れたとは思われない。すでにのべたように、讃岐守として在任中、

菅家廊下の庭先に植えていた竹が、雪の重みで割れ裂けたできごとがあったのを、いま流謫の大宰府にいる道真は、脳裏によみがえっていたにちがいない。

筑紫での住まいがどこだったのか定説はないが、大宰府南館（現在、榎社がある）あたりだとするなら、今日ではほとんど通古賀や片野付近も住宅化してしまっただが、当時は政庁前から御笠川にそって官道がのび、その官道ぞいに集落が点在していただろう。「東籬」は京都の宣風坊にある庭。鎮西の府のこの地と京都の私邸は、いまいやくつもの関所、いくつもの山やまにへだてられ、ついには家からの消息も絶えてしまった。この厳しい寒さの折、一晩中はげしく降った雪は、南館あたりの「白屋」をすっかり埋めつくしてしまったのである。

「白屋」は白い茅で屋根を葺いただけの貧しい家のこと。早い時代に魏の曹植（一九二～二三二）の「君子行」に「周公下白屋、吐哺不及餐」の用例がある。「君子行」は「瓜田不纳履、李下不正冠」というあまりにも知られた表現があり、これによつたとも思われるが、道真がまず学んだのは、楽天の次のような五言詩「小橋前の新竹に題して客を招く」ではないか。

鴈齒がんしの小虹橋、垂簷すめえんの低白屋。

橋前何の有る所ぞ、苒苒ぜんぜんたる新生の竹。

皮開けて褐錦かつきんを坼さき、節露ふじあはれて青玉せいぎよくを抽ぬく。

筠翠ひんすい餐あふべきが如く、粉霜こなしも触ふるるに忍しのびず。

間吟かんぎん声未だ已やまず、幽翫いうがん心足り難し。

好風かうふう煙えんを管領くわんりやうし、凡草ぼんそう木きを輕欺けいぎす。

誰たれか能よく月つきある夜、我われに伴ともうて林中しんちゆうに宿しゆくせん。

君が為に一杯を傾け、竹枝の曲を狂歌せん。

「小虹橋」はいわゆる太鼓橋。軒の垂れた小さな家があって、その前にはこれまた小さな太鼓橋がかかっている。その橋の前に勢いよくそびえて立つ新竹が生えている。皮がはがれ褐色の錦を裂いて節があらわれて、まるで青玉のようだ。翠色みどりいろが滴るようですくえそうだし、新竹らしくまとった白い粉は落ちそうで風情がある。どれだけ褒めても飽きることがなく、風や霞をわがものとして周囲の草や木を尻目に懸けて威風堂々。ここまでは、竹への讚美。「客」の素性は不明。客を招いて、この「竹」を見ながら、かの劉禹錫りゅううきよく（七七二〜八四二）らが詠った「竹枝の詞」を詠いたものだ、と。

道真の前には、樂天が褒めてやまないような竹はない。無残にも、雪の重みに耐えかねて裂けてしまった竹があるのだ。竹の性は「直」であるのは、すでに明らかにしたが、そうして一筋に伸びようとしたものの、自らはどうしたものかと狼狽しながら、地にひれ伏しているのだ。それだけではない。「貞」つまり貞潔な心を持ち、秋になり冬になっても桐のように葉の色合いを変えるわけではない。ところがその甲斐なく、折れて破碎してしまったのである。やがては樂天のいう「青玉」のような幹も「筠翠」の鮮やかな翠色も失い、枯れはてて芥になってしまうのである。

長くて細めの竹は釣り竿にすればよかった、短いのは竹筒たけかたにして書齋の文房具にすればよかったのに。そうすればわたしの生涯はこのうえなく幸いだったものを。いまさら、何といおうとも、詮ないことでしかないのである。とはいえ、もし仮に刈り取られ漁夫の手になじむ竿になった竹は、あるいはまた殺青ころせいされ竹筒となり文机に置かれた竹は、はたして自足するだろうか。これは考えてよい疑問なのだが、いまはふれない。

「漣漣」の「漣」はさざ波の意で、「漣漣」は、さざ波が立ち広がっていくように、さめざめと声を立てて泣く意。

『大系』は頭注で、このあたりの描写は、いまは追憶のなかにしかない、京の家に残してきた竹への呼びかけだろうと注解している。詩題が「家なる竹」なのだから、確かにそうだろうが、それとともに嚴冬の太宰府で雪の重みで折れ裂けてしまった片野あたりの竹でもあると解すべきだろう。

「直を抱きて」自ら雪の大地に這いつくばっている、「貞を含むて」その甲斐もなく割れて碎けたのは、道真自身だからである。たとえ養生してやれなくても、その竹の貞節を貫こうとする性をどうすればよいのだろうか。

道真は竹であった。

注

- (1) 道真が讃岐国守在任中の宮廷での騒動、いわゆる「阿衡」紛議への関わり方がどのようなようであったかも、道真のこうした行動の一因になっているのかもしれない。
- (2) 「七」は文体の名で、賦騷の類。駢儷体で問答を用い、おおむね韻語で創作されている。枚乗の「七発八首」は『文選』第34巻所収。
- (3) 「信南山」は、「信なる彼の南山、維れ禹の甸めし、眇眇たる原隰、曾孫のきみゆる、すなはち疆はりすなはち理つくり、其の畝を南に東に」に始まる農耕の豊穰と長寿を祈る歌。
- (4) 『山海経』「大荒北経」に「赤水の北に章尾山あり。神あり。人面蛇神あり。其れ瞑すれば乃ち晦く、其れ視れば乃ち明るし。是れ九陰を燭らす。是れを燭籠と謂ふ」とある。
- (5) 「馮夷」は、河の神。同じ河の神である「河伯」が人面魚身であるのに、こちらは竜形。
- (6) ちなみに道真が栄爵と称される従五位下に叙せられたのは、貞観一六年（八七四）一月七日、従五位上は元慶三年（八七九）一月七日、従四位下は寛平四年（八九二）一月七日、従三位は寛平七年（八九五）一〇月二六日、従二位は昌泰四年（九〇一）一月七日である。
- (7) 『全唐詩』（卷397）には、「昔公憐我直、比之秋竹竿。秋來苦相憶、種竹廟前看。失地顔色改、傷根枝葉殘。清風猶漸漸、高節

空团团。鳴蟬聒暮景、跳蛙集幽闌。塵土復昼夜、梢雲良獨難。丹丘信云遠、安得臨仙壇。瘴江冬草綠、何人驚歲寒。可憐亭亭幹、
□□青琅玕。孤鳳竟不至、坐傷時節闌」とある。

- (8) 樂天のいう「歲寒」も「久要」も、「論語」に典故のある語句。「子曰く、年寒くして、然る後に松柏の彫むに後るるを知る」
(第九、子罕)。時節が寒くなることに世間の乱れを譬え、ほかの草木がしほむのに、後までしほまずにいる松や柏の木に、大
事のとときの君子の節操を譬えた。「子路成人を問ふ。……久要平生の言を忘れずんば、亦以て成人と為す可し」と(第一四、憲問)。
「成人」は完全な人格者、「久要」は古い約束事の意。

- (9) たとえば、文なら劉向(前七七〜前六)の「愍命」・「鄧析書録」、劉歆(?〜二三)の「孝武廟不毀議」あたり、詩なら劉孝
儀(四八四〜四五〇)の「行過康王故第苑詩」、張正見(生没年不詳、太建年間に死没)の「陪衡陽王遊耆闍寺詩」あたりが早
い例。『文選』(巻7)にある楊子雲(前五三〜一八)の「甘泉賦」は、ひろく知られるところだろう。漢の孝成帝の甘泉宮を賦
して「皐伊（あいつともがら）の徒、倫（うん）に冠たり能（よ）に魁（くわい）たり。甘棠の恵を函（はこ）にし、東征の意を挟み、相与（あひま）に陽靈の宮（みや）に齋（いみ）す」とある。

- (10) あるいは、樹皮を剥いただけで、油や漆を塗っていないむき出しの白木かもしれない。

- (11) 「竹枝の詞」は樂府の一体で、劉禹錫が朗州(湖南省)に流されたときに、民謡に刺激をうけ、その地の風土や男女の風俗な
どを詠じたのが、始発だといわれている。当時の文人たちの間で、もてはやされたらしい。

樂天にも、「瞿塘峡口水煙低、白帝城頭月向西。唱到竹枝声咽处、寒猿鬧鳥一時啼」・「竹枝苦怨何人、夜静山空歌又聞。蛮
兒巴女齐声唱、愁殺江南病使君」・「巴東船舫上巴西、波面風生雨脚齐。水蓼冷花紅簇簇、江灘濕葉碧淒淒」・「江畔誰人唱竹枝、
前声咽後声遲。怪來調苦緣詞苦、多是通州司馬詩」の「竹枝詞四首」がある。「通州司馬」は元稹をいうのだろう。

【付記】

本文中の引用は主に次の諸本による。

『菅家文章 菅家後集』川口久雄 校注(日本古典文学大系)。数字も大系本にしたがう。

『白楽天全詩集』佐久 節 訳註(統国訳漢文大成)。ただし、「養竹記」は『白氏文集』岡村 繁(新釈漢文大系)によった。

『詩経全釈』境 武男。